

2015（平成27）年度 西都原考古博物館の事業について

2014 年は開館 10 周年を迎えた年であり、さまざまな事業や新たな試みにがむしやりに走り続けた日々であった。4 月の開館 10 周年記念式典に始まり、年間を通しての記念特別展（展示会 I～IV）の開催、4 冊の図録の刊行、韓国国立羅州博物館との学術文化交流協定の締結、西都原古墳群総括報告書の刊行など、立ち止まることもないまま一年が過ぎ去った。この一年は、開館から積み上げてきた西都原考古博物館の活動と、大正時代の発掘から 100 年が経過した西都原古墳群の調査と研究の足跡と到達点を明確にし、今後進むべき方向性を模索するための一つの定点となるものと考えている。

年度が変わり、定期人事異動によってスタッフの半数が入れ替わった。ここから、また、新たな歩みを進めなければならない。開館 12 年目の今年度は、通常のペースに戻り、特別展 1 回、国際交流展 1 回、企画展 2 回を予定している。古墳群の発掘調査と整備工事も継続する必要がある。

春の展示は、企画展 I 「文字が伝えたもの～宮崎県出土考古資料にみる文字と心～」を開催する。重要文化財「児湯郡印」や「景初四年銘」銅鏡をはじめ、平城京で出土した「日向国」と記された木簡、隼人の盾の裏側に残された落書き、祭祀に用いられた大量の墨書土器、小石一つに一字ずつ写経された一字一石経など、考古学的な出土品に見られる文字を取り上げる。

夏の特別展は、「生目・西都原・新田原～日向における古墳時代の首長墓系譜を読む～」を開催する。古墳時代の前・中・後期の代表的な古墳群を取り上げ、古代日向の首長墓の変遷とその背景を探るものである。これは、この数年、県や関連市町で進めている「南九州の古墳文化を世界文化遺産に」という取り組みに連動するものである。

秋の国際交流展は、「美と技と祈り～台湾原住民の植物利用と南九州人の軽石利用～」と題して、2013 年 12 月に学術文化交流協定を締結した台湾新北市十三行博物館との共催展示を行う。樹皮布、カラムシ、バ



文字が伝えたもの～宮崎県出土考古資料にみる文字と心～

この展覧会では、日本の文字文化の歴史をたどり、中国や朝鮮半島などから伝来した文字資料の歴史をたどり、宮崎県出土の文字資料の歴史をたどります。考古資料の中の文字資料は、筆で書かれたもの、へらなどで刻まれたもの、捺印されたものなどがあり、また、その対象には、紙、木片（木簡）、土器、礎石、金属などさまざまな媒体や使い方は多岐にわたります。

展示会では、主に宮崎県発掘から出土した原初時代から中世にわたる文字に関する考古資料の集積と紹介をします。そして、文字が伝えたものとは何かを考えます。

- 「景初四年」銘 鏡籠輪 (R) 高瀬町 伝馬田古墳群出土
大正時代に日向国に出土した文字の記された考古資料。当時の人は文字をどのように認識していたのでしょうか。鏡には、製作年、作者、目的などが彫刻されています。この鏡の景初四年は、帝位継承に後者を添った翌年ですが、実在しない年号です。
- 墨書土器群 宮崎市 金刀田発掘出土
古代の文字資料の中で最も多く出土する墨書土器。金刀田遺跡では、古墳や人名を土器に墨書したものが多数出土し、水辺の祭祀が行われていたと考えられています。特に「日向」の古墳文字「日向」は、墨書土器の出土で、文字の時代から、文字から記号への変化や文字の伝播などを考えることができます。
- 重要文化財 銅印「児湯郡印」 高瀬町 所有
全国で現存する銅印は5例しかなく、そのうちの一つが「児湯郡印」です。「児湯郡印」は、平安時代の初期に高瀬町で発掘された重要文化財で、高瀬町発掘の列石から伝わったもので、高瀬町に高瀬郡が存在した可能性が指摘される貴重な資料です。
- 一字一石経 宮崎市 下野有瀬発掘出土
一字一石経は、軽石(重石)に鉄典(一字)を刻み、一字を刻むというもので、それを多数集積した土器に押しつけて複製した遺書・儀書を目的とした行為です。碑文から多くの情報を得ることができますが、それ以外にも、軽石が押しつけられた文字からわかる情報を伝えます。

特別展 年度別展示会開催情報

展示会 I	展示会 II	展示会 III
「生目・西都原・新田原」 2015(平成27年) 7月18日(土)～9月13日(日)	「美と技と祈り」 2015(平成27年) 10月15日(土)～11月29日(日)	「それは何を運んだのか」 2016(平成28年) 1月16日(土)～3月21日(日)

ナナシルクなどの植物を利用した台湾原住民の服飾文化と、過酷な自然災害の爪痕（火山噴出物）である軽石を、原始古代から現代に至るまでの南九州の人々が、実生活や精神文化の具として利用してきた歴史を紹介する。

冬の企画展は、「それは何を運んだのか～古墳時代のフネ・舟・船～」を開催する。重要文化財の埴輪船をはじめ、新たに確認された船形埴輪、古墳の埋葬空間に描かれた舟、水田跡から出土したフネ（槽）など、モノや魂を運んだフネを紹介する。

古墳群の調査と整備については、昨年度の 265 号墳（船塚）の発掘調査で、左くびれ部に造り出しの存在が明らかになり、小片ながらも出土した須恵器から築造時期が 5 世紀後半～末頃（少なくとも 6 世紀には下らない）ということが確認された。また、後円部墳頂平坦面において大正時代の調査坑の輪郭が確認され、碧玉製管玉 1 点が出土した。引き続き本年度は、大正時代調査の検証として、主体部（木棺直葬）の調査が必要と考えている。

100 号墳の再整備については、本コラムの 37 号（2015 年 2 月 7 日付け）で書いたように、発掘された状態で葺石を露出公開していた墳丘に対し、保護盛土での被覆と芝貼りによって築造当時の墳形復元を行う計画である。これは、整備公開から 12 年が経過し、古墳本来の姿を理解してもらうという所期の目的は達成されたという判断から、より保存に重心をおいた整備に移行するものである。昨年度の後円部に続き、本年度は前方部と周堀部の工事を行い、整備を完了する予定である。

博物館の展示室では、古墳の大型立体模型 2 台をスクリーンとして、撮影画像やコンピュータグラフィックを駆使した解説映像を映している。西都原古墳群の盟主である男狭穂塚・女狭穂塚は、陵墓参考地であることから域内への立ち入りが制限されている。また、九州一の規模を誇る前方後円墳（男狭穂塚は列島一の帆立貝形古墳）であるが故に、その全体形が分からないという難点がある。これを解決する一つの手段として、大型模型と解説映像は、あたかも上空から巨大古墳を見下ろしているかのように、その形状と規模を体感できるものとして好評であるが、開館以来同じソフトを映写してきたことから内容の更新を計画した。「被葬者の謎を探る」と題したソフトに、地中レーダー探査をはじめとする近年の研究成果を盛り込み、「巨大古墳の築造の謎を探る」とする更新版のソフトを製作した。本年度は、西都原古墳群の全体を表現した大型模型に映写するソフトについて、古墳群形成の過程とその意味について考える内容を加えて更新版を製作する。

その他、2015 年度は、展示室内の解説パネル等の情報について、ICT を活用した多言語化の取り組みを行う。外国からの来館者をはじめ、博物館利用者の利便性の向上を図り、併せて「南九州の古墳文化を世界文化遺産に」という機運を盛り上げていきたいと考えている。

（東 憲章）